

令和元年度 鳥取市中堅教諭等資質向上研修アンケート調査結果

アンケート調査の趣旨

鳥取市では、本市教育の最重要課題である学校不適応解消（未然防止）・学力向上に向け、特別支援教育の視点を基盤にした研修をしています。

鳥取市教育センターは「研修で学校が変わる」を合言葉に、中堅教諭等資質向上研修を核として複数のキャリアステージや職務とのコラボ研修を実施し、効果的に研修成果を学校運営に活かすマネジメントサイクルの確立を図っています。

本アンケート調査では、鳥取市中堅教諭等資質向上研修対象者が研修したことを校内で協働しながら実践に活かし、研修成果を還元している状況を把握するとともに、今後の研修企画の資料とすることを目的としています。

※アンケート期間 令和元年12月5日～1月15日

※アンケート対象 中堅教諭等資質向上研修対象者16名（15校）

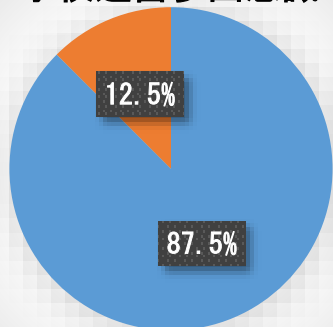
考察

（○：成果、▲：課題、◆：展望）

- 中堅教諭等資質向上研修対象者（以下、中堅教諭）が、校内の若手教員に関わることで自分への気づきを深めてミドルリーダーとしての自覚が高まり、学校運営に積極的に参画する意識が高まってきている。
- 昨年度より特別支援教育主任との連携が増えた。特別支援教育の視点を基盤とした児童生徒理解や、よりよい人間関係づくりに関する学びを、特別支援教育主任と連携して学校の取組に活かしていることがうかがえた。
- 管理職が、中堅教諭等資質向上研修の研修内容を活かして、中堅教諭と若手教員を意図的に協働させ、学校教育目標の達成に向けた取組を推進させると同時に校内OJTによる人材育成を図っていることがうかがえた。
- ▲研修での学びを中堅教諭自身の実践に活かすにとどまり、研修内容の伝達や情報発信等、他の教職員への働きかけがやや弱い状況もみられた。
- ◆本年度は、全ての集合研修で中堅教諭同士が情報交換する時間を設けた。講義・演習内容の理解をさらに深めたり、他校の実践を知ったりすることができ、実践意欲を高めることができた。来年度も中堅教諭同士による情報交換や協議の時間を設定する。
- ◆多くの中堅教諭は、校外研修の内容を積極的に自身の実践に取り入れ、学校の取組につなげている。ただし、校内への情報発信がやや弱い状況もみられたので、研修での学びを校内で共有するために、研修資料の回覧や「研修のまとめ」の活用を促していく。
- ◆若手教員の増加に伴い、中堅教諭が若手教員のメンターの役割を担うことへの期待も高まっている。来年度は、中堅教諭と若手教員との連携を推進する研修を充実させていきたい。

1 研修受講者の学校運営参画意識の変化

学校運営参画意識



■高まった ■やや高まった ■変わらない ■下がった

<回答内容>

（昨年度）

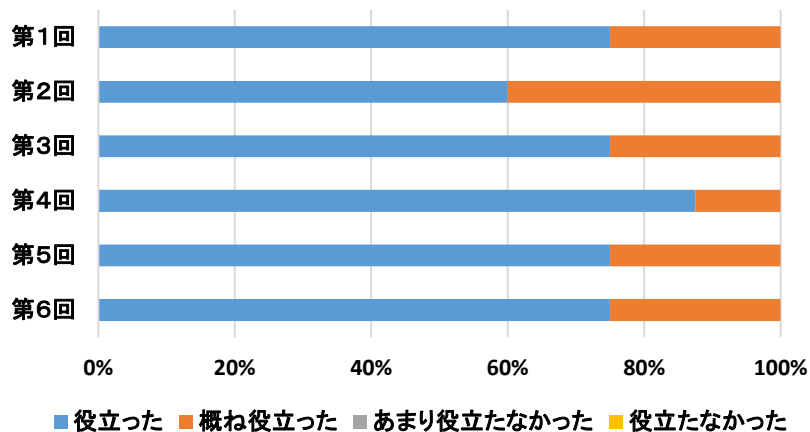
- ・高まった……………87.5%（61.5%）
- ・やや高まった…12.5%（38.5%）

<考察>

○全員が肯定的に回答している。中堅教諭等資質向上研修を受講したことで、ミドルリーダーとして学校課題解決に向けた取組を推進し、学校運営に積極的に参画していこうとする意識の高まりがうかがえる。

2 学校課題解決の取組に活かす校外研修の有効度

学校課題解決の取組に活かす校外研修の有効度



<回答内容>

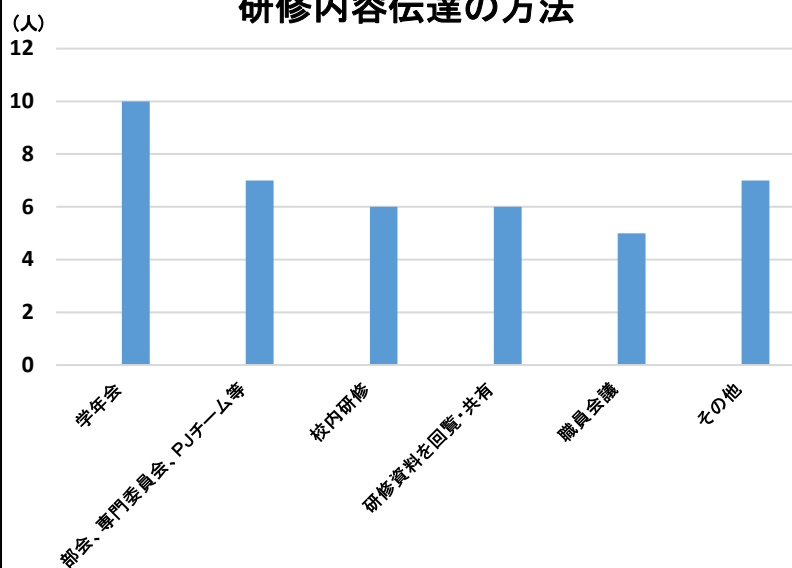
役立った…第1回：75%
第2回：60%
第3回：75%
第4回：82.5%
第5回：75%
第6回：75%

<考察>

○各校外研修の研修内容は、学校課題解決に向けた取組に概ね活かされている。

3 研修内容伝達の方法

研修内容伝達の方法



<回答内容> ※複数回答可 (昨年度)

- ・学年会……………10人(6人)
- ・部会、専門委員会等……7人(3人)
- ・校内研修……………6人(5人)
- ・研修資料を回覧・共有…6人(5人)

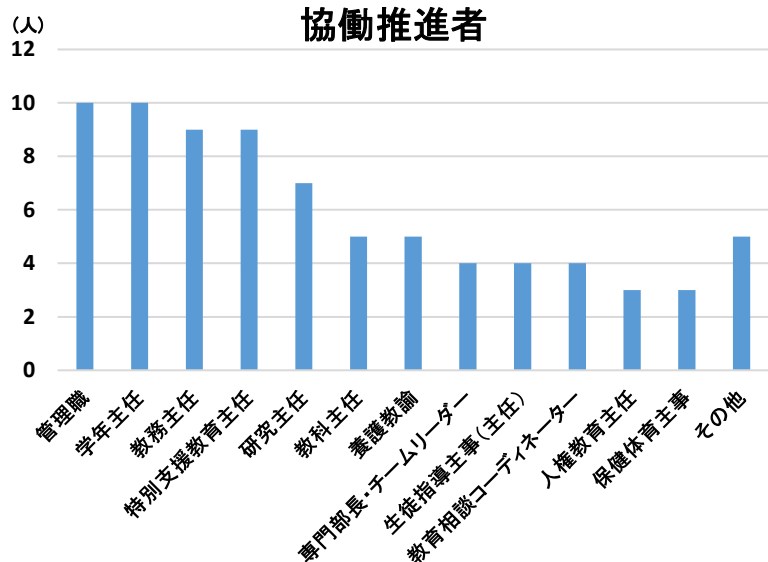
※その他(中学校区研修会で伝達・報告、初任者や講師に資料作成して伝達・報告等)

<考察>

○学年会や部会・専門部会等で、研修内容を報告・伝達を行っていることが多い。
○短時間でも校内研修や職員会議で研修内容を報告している学校がある。
▲研修内容の情報発信がやや弱い。

4 研修内容を学校課題解決に活かす協働推進者

協働推進者



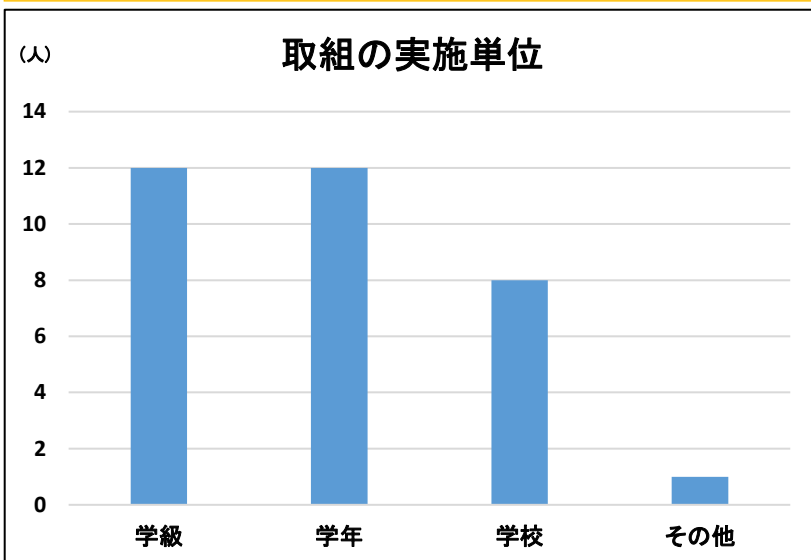
<回答内容> ※複数回答可 (昨年度)

- ・管理職……………10人(8人)
- ・学年主任……………10人(6人)
- ・教務主任……………9人(5人)
- ・特別支援教育主任…9人(2人)
- ・研究主任……………7人(7人)

<考察>

○中堅教諭は、管理職に研修内容を報告し、校内での取組に関する相談を行っていることがうかがえる。
○教務主任や研究主任と連携することで、全校での組織的な取組につなげようとしていることがうかがえる。
○昨年度よりも特別支援教育主任との協働が促進されている。

5 研修内容を学校課題解決に活かす取組の実施単位



<回答内容> ※複数回答可（昨年度）

- ・学年…12人（10人）
- ・学級…12人（9人）
- ・学校…8人（5人）

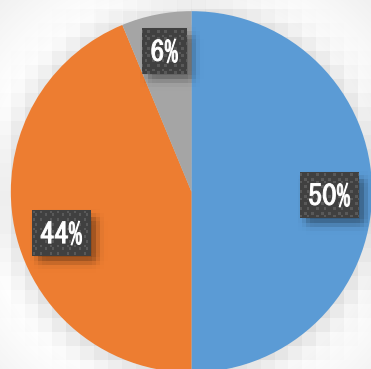
<考察>

○中堅教諭は、研修内容を活かした取組を、まずは自身の学級や学年団で実践している。

○昨年度より学校全体での取組を行った中堅教諭が増えており、研修内容が学校の取組に活かされていることがうかがえる。

6 研修内容の学校不適応解消（未然防止）の取組推進への活用度

研修内容の学校不適応解消（未然防止）の取組推進への活用度



■活かした ■やや活かした ■あまり活かせなかった ■活かせなかった

<回答内容>

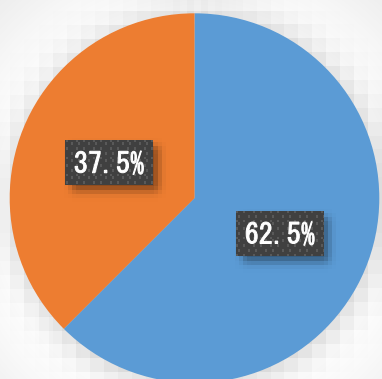
- ・活かした…50%（8人）
- ・やや活かした…44%（7人）
- ・あまり活かせなかった…6%（1人）

<考察>

○研修での学びは、学校不適応解消（未然防止）の取組に概ね活かされている。

7 研修内容の授業改善への活用度

研修内容の授業改善への活用度



■活かした ■やや活かした ■あまり活かせなかった ■活かせなかった

<回答内容>

- ・活かした…62.5%（10人）
- ・やや活かした…37.5%（6人）

<考察>

○全員が肯定的に回答している。中堅教諭が、研修で学んだことを日常の授業改善につなげていることがうかがえる。

8 研修内容を学校課題解決に活かす取組の具体的内容

①どのような取組を行いましたか。	②取組によってどのような効果がありましたか。
特別支援教育の視点を基盤とした児童生徒理解、人間関係づくり	
<p><回答内容></p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちのよりよい人間関係づくりにつながるため、ピア・サポートで学んだ手法を使うようにした。みんなが気持ちよく生活できるよう、望ましい行動をたくさん見つけて褒め伝えることに努めた。 キャリア指導において、「キャリア」＝「進路」だけでなく、日常的な対話や言葉かけを行い、生徒の生活と学習を「わだち」のように繋げる支援を行った。 学校全体で取り組んでいるアセスの分析をもとに、SEL-8Sを取り入れ、関わり方のスキルを身につけさせるようにした。実践の成果と課題を職員研修で共有した。特別支援の視点や具体的な支援方法を学級経営、授業づくりに取り入れた。 自己肯定感の低い児童が多いことが本校の課題であったため、研修で学んだ「ポジティブ行動支援」に取り組んだ。学習面、生活面において、その子にとってのよい行動を見つけ、具体的に褒めてシールを貼り、日々の変化を可視化できるようにした。全校児童「賀露のすてき見つけ」で、友達のよいところをカードに書いてプレゼントした。教師からも、よい行動をしている児童にすてきカードを書いて渡した。 児童のよい行いを引き出すスクールワイド PBSを取り入れた児童会の取り組みと生活目標の設定。 	<ul style="list-style-type: none"> 子ども同士のトラブルが起きた際も、お互いの考えを落ち着いて伝え合い、納得し合い、気持ちよく解決できるようになってきた。 休憩時間には生徒から様々な会話をしてくれるようになり、生徒理解をさらに深めることができた。また、授業においても生徒から積極的に質問をする回数が増えた。 まだ関わり方のスキルが十分に身についたとは言えないが、児童の学校生活満足度は向上している。配慮が必要な児童も、的確に見取り合理的配慮をすることで、意欲的に学習に向かうようになった。また、よさに目を向けることで、児童との間に信頼関係ができ、必要な指導が入りやすくなった。 当たり前のようなことでも、児童のがんばりをまずは褒めることで、もっと認められたいという思いをもつようになった。できていないことより「こんな子どもになってほしい」という思いを伝えていったことで、子ども同士でフォローする姿が見られ、温かい雰囲気学級になってきた。担任以外の教員から褒めてもらえることも、大きな励みになっていた。全教職員で子どもを育てるという意識をもつことが大切である。 スクールワイド PBS をアレンジし、本校児童が大事にしたい姿「こんな自分になりたい」を引き出し、生活目標の設定と互いに評価し合う取り組みを行い、前向きに学習や掃除、人間関係づくりに向かおうとする姿が見られるようになった。
中堅教諭を核とした校内OJTの推進	
<ul style="list-style-type: none"> 校内の若手教員に、自分が集合研修で学んだことをまとめて伝達した。若手教員に、今後の学級経営や授業づくりで活かそうなことをレポートしてもらい、実践に活かしてもらった。 	<ul style="list-style-type: none"> 若手教員から「靴の履き方や鉛筆の持ち方、姿勢等で子どものサインを意識することができるようになった」「子どもに対する『褒める言葉かけ』が増やせたり、ポジティブな行動を提案できたりするようになり、子どもたちが落ち着いて学習に取り組めるようになった」という報告を得ている。
<p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ○多くの中堅教諭が、研修で学んだピア・サポートやSEL-8S、ポジティブ行動支援等を自分の学級や学校の取組に取り入れて実践し、児童生徒のよりよい人間関係づくりに役立っている。 ○中堅教諭がメンターの役割を担い、若手教員に授業づくりや学級経営等の助言を行っている。学年団や分掌等、管理職が中堅教諭等資質向上研修の研修内容を活かして中堅教諭と若手教員を意図的に協働させ、学校課題解決に向けた取組を推進すると同時に、校内OJTによる人材育成を図っていることがうかがえた。 ◆来年度は、中堅教諭がミドルリーダーとして若手育成に積極的に関わっていけるように、校内研修における若手教員との連携をより充実させていく。 	